木造遺構よりみた朝鮮高麗朝建築の様式に関する一考察

A STUDY ON THE ARCHITECTURAL STYLE DURING CHOSEON AND KORYO DYNASTY BY INVESTIGATION OF THE HISTORICAL WOODEN ARCHITECTURES

片桐正夫*

Masao KATAGIRI

This study is about import of the architectural technique and existence of the form during Koryo and Choseon dynasty, through investigation of the eight(Chu-shim-po style) and four(Ta-po style) wooden architectures of Koryo as well as the trend of Chinese architecture and also the cultural exchange between China and Korea.

This study led to the following results:

1. In case of Chu-shim-po style, the traditional form of united Shilla was changed, using Soiseo-attached-Hiziki, thrust-through-Hiziki and based-capital by influence of the technique and style from Pei-sung and Nan-sung. And by influence of Ta-po style, it was changed, using straight capital and post of roof structure.
2. In case of Ta-po style, the combination of Soiseo-attached-Hiziki was introduced by import of the new technique and form from Yuan, while Odaruki was not used much.

Keywords : Soiseo-attached-Hiziki , Chu-shim-po style , Ta-po style , architecture of Koryo

化粧尾垂木, 疎組(柱心包系), 詰組(多包系), 高麗建築

1. はじめに

高麗王朝は、松岳地方(開城市を中心とする地方)の豪族であり、統一新羅朝の武人でもあった王建によって918年に開かれ、王宮を開城に置いた。以来、やはり武人の出身の李成桂に政権を奪われるまで34代、恭讓王4年(1392年)に至る470年余の長期政権であった。

この時代は、中国においても新しい時代の転換期であり、漢民族中心の国家運営から、契丹、女真、モンゴルなど北方民族との抗争と融合の中で多民族共存の国家へと転がりを見せ、文化活動にもこのことが当然のことながら影響し、政治のみでなく、社会的にも変化の時代であったことは周知のことである。

年表1に示したように、朝鮮では、地理的環境からも中国の政変の影響は、日本よりも直接的で、唐朝崩壊後の民族対立抗争を内包した南北対立王朝の出現は、高麗政権の国家運営や文化活動にも大きく係わってくることとなった。

官僚機構は建国時代には唐制になっていたが、やがて北宋との交流を通じて、その制度になった。しかし、北宋にかわって元の支配が強まると共に、開城を離れて、江華島へ王宮を移すなどの抵抗もあったが、それも限界となり、元朝に従い、官僚機構のみでなくあらゆる分野で元の文物が導入されることとなった。(注1, 2, 3)

このような政治外交状況を背景にした国内体制の運営にあたって、儒教と仏教の尊重が計られた結果、儒学教育研究機関が整備され(私学12徒、京師6学など)、また、仏教は、大蔵経の刻板事業にみられるように新羅時

代以来の国家保護が更に続いていた。

特に、現世利益を求める高麗貴族の信仰心と義天(文宗の第4子。1060年代~)の天台宗の開宗をきっかけとして興った仏教改革によって、既に9世紀統一新羅時代末より盛んとなっていた禅宗をもとにした曹溪宗の成立をもたらすなど、旧新羅仏教とは異なる境地を開くに至った。

こうした仏教界の活動は、国家保護によって都市部だけでなく、広く山地に伽藍を求め、その整備がなされた。建築界は当然こうした時代の要求に応じて、国都王宮の建設をはじめ、儒学校、寺院の建設を中心とした工事に係わる中で、発展をとげた。外交及び交易など北宋との親しい関係を背景にして、また、禅宗をはじめ文化的にも新しい境地を開いて学ぶものの多かったこともあって、元朝の成立から、その圧力が半島におよぶまでの間、高麗朝は、宋との交流を中心としつつ、遼・金の影響をも受けつつ進んだことが広く知られている。

2. 中国唐宋から元代に至る木造建築の発展経過

唐宋から元代にかけての建築の技術的発展、特に軒組形式と頭貫(闌額)・台輪(普柏枋)・尾垂木(昂)・さし肘木(挿棋)がどのように進化したのか、遺構をもとに考察したい。

中国では、唐から元代にかけての遺構数が増造、石造のものを加えて約140棟余とみられている。この中から地域、時代、特徴などを考慮して代表的な遺構(注4)

* 日本大学理工学部建築学科 助教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, College of Science & Technology, Nihon University, Dr. Eng.

をとりあげて考察の対象とする。

軒組の変化のきざしの初見遺構は、唐末の現存遺構仏光寺大殿（山西 857年）で、台輪にあたる部材（普柏枋）は使用されていないが、頭貫（闌額）は疎組の南禅寺大殿（山西 782年）のそれより太く（注5）なり、柱間中備軒組（二手先の組物）をその上にのせているが、これが、詰組形式の前段階の技術的過程を示すものと一般に解されている。

そして、大雲院大仏殿（山西 後唐 923～35年図参照）では台輪（普柏枋）が入れられ、その上に、柱上・柱間共に同形の二手先組物が配されており、いわゆる詰組系の技術が、唐末から五代にかけての間に、山西省五台山一帯の寺院建築建設の過程で発展したことを示しているものといえる。

大雲院 大仏殿（後唐代 923～35年）

『营造法式』（注6）の刊行された北宋1100年には、台輪（普柏枋）付の詰組の技術が完成していたことが知られるが、表2（付図）に示したように、900年代前半期ごろから普及してゆき、900年末から以降には北宋の地のみならず、遼の地にも普及していたことが明らかになっている。

同時に疎組系の建築は、住宅や付属的な建物に使用される例が多数派となり、一部の例外を除いては、建築界の先進的技術の系統からはずれる事となった。

表2の5、華林寺大殿は疎組系の建築であるが、福建省福州にあって、皿斗付斗・さし肘木（挿棋）をもつもので、この地方に我国大仏様のルーツを求めることが定説となっているが、これを示す一事例である。なお、皿斗、さし肘木などの形式は、既に漢代に出現していたもので、南宋代に至るまで、中央から遠くはなれていたこの地に、これらの形式が存在している理由は明らかではないが、一般論としては、中央からはなれた地であったことが、形式としての固定化を助長し、旧来の技術が永く伝承されることとなったことが指摘されよう。（注7）

次に、軒組の変化について遺構を整理してみると（表2）次の諸点が指摘されよう。前述したように五代以降疎組系の建築では大きな技術的進展変化がみられた跡がないが、詰組系では尾垂木（昂）の形式と使用形態に多様性がみられる。

肘木（華棋）の重ね合わせで軒組みが構成される形式（ただし柱上のみは梁頭が加わる）は疎組系では南禅寺大殿（表2図1）にみられるように唐代、あるいはそれ以前からの存在が認められるが、詰組系でも900年代では独楽寺観音閣（表2図6）大雲寺大殿（表2図8）などの例がみられ、唐以降もこの形式が使われていたことを示している。

しかし、地域的にみると、この形式は1000年代以降では北部のかつての唐朝の中心地域陝西省地方や、唐代仏跡の多い五台山・山西省を含む地域をその支配地とした遼、更に金の政権下で建設された建築（表2図9, 10, 11, 19, 20, 21）に多くみられることとなる。

南部北宋あるいは南宋の地にこの形式をとることは例外的に存在することはあっても一般的には用いられなくなることが指摘されよう。

次に尾垂木（昂）について見ると、古くは、表2図2に示すように唐代には、その存在があったものとされる。尾垂木をもつ我国法隆寺の様式が高句麗系、さらには北魏系にまでたどることが可能性として高いことを示す関口欣也博士の論考（注8）また、拙稿（注9）でも述べたように単純な形式では漢代にそのルーツをたどるこ

とができるなどから、唐代の早い時期には、仏光寺大殿のような形式が定着していたものといえよう。

この尾垂木の使用は、南北地域に広くしかも長期間にわたってみられるものであり、軒組の構造上の重要部材として認識されていたものといえる。

朝鮮でいう牛舌（注10）中国の（仮昂、表2では仮）という部材は、日本では東大寺鐘楼（1207～10年）を初見とするが、あまり用いられず、江戸時代の後期に時々変わった形式として採用される程度で、尾垂木様木鼻、化粧尾垂木、擬尾垂木、など様々にいわれて、この部材に広く通用する名称がつけられていない。

本稿では、筆者が命名これまでの発表論文で使用してきた化粧尾垂木を仮に使用してよぶこととする。

この化粧尾垂木は、中国では晋祠聖母殿下層軒組（表2, 図12）を初見とする。しかし、この形態は、第4節でくわしく述べるように、水平肘木の組み上げ軒組（表2で華とあるもの）系統の肘木鼻の変化したものと考えられ、尾垂木が次第に簡略化してゆき（表2, 図14・17・23）、营造法式の図（表2, 図24）に示されている形式が成立・具体化された初見事例として善化寺大殿（表2, 図22）があげられる。

さらに、進んで1100年代末の臨汾大中楼では、完全な形の化粧尾垂木（仮昂）がみられる。

元代に入ると陽和楼（表2, 図28）のように尾垂木と化粧尾垂木を混合する軒組なども出現する。1300年代以降は詰組では、（仮昂）と（昂）の軒組をもつ建築が中心となって建設が行われてゆく。しかし、かつての遼・金など北部の地域では（仮昂）の使用例が非常に多いことは注目される。

そして、肘木重ねによる軒組は、化粧尾垂木付の軒組に吸収されたと考えるのが妥当であろう。

これらをまとめると、

1. 疎組系の形式は、唐以降、大きな技術的進展はみられた跡がなく、住宅系の遺構に多用されることが確認できる。
2. 疎組系で華林寺大殿のように福建を中心とする南部で皿斗付斗、さし肘木などの形式がみられる。

3. 詰組系では、3つのタイプの軒組があり、それぞれ異なった進展を遂げている。

尾垂木使用の軒組は、唐以前から清代に至るまで全地域で多用される一方、1000年を過ぎて尾垂木の簡略化が始まり、营造法式に化粧尾垂木の祖形がみられ、1100年末には完全な化粧尾垂木の形式が成立した。

化粧尾垂木による軒組は、前述したように、营造法式に示されて以降、事例が次第に増加の傾向にあり、元代以降多用される。

3. 中国建築の高麗建築への影響

表1に記載のように中・朝交流については杉山信三博士の詳細な研究があり、この成果に負う所が多い。中国の政変が一応のおさまりをみせると、再び、両国間に交流が始まった。宋の商人の往来と外交交流、さらには禅宗の導入が、我国よりやや早く、12世紀前半から始まっていた。（注11）残念ながら遺構が残されていないため、当時どのような形式の建築があったのか知ることができない。

元の建国は、南宋の圧迫と高麗朝への圧力となり、高麗政府は江華島へ移り（1232～70年）、南宋との交易を通じて交流を続け、この間に大藏經木版刻（現・海印寺藏）事業を行うなど、仏教への信頼は変わらず続いたようである。（注2）

やがて江華島を出た政府は、新たに王位についた忠烈王とその元朝一族の血を引く王妃によって元風の文化が

(注) 各国の時代区分は『日本史年表』(歴史学研究会編 岩波書店 1966年版)をもとにしている。中国・朝鮮間の交流で杉と示したのは、杉山浩三『韓國の中國建築』(相模書房 昭和59年)と、中国・日本間の交流で田を示したのは、田中淡「中國新屋形式における構造の改革に関する史的考察」(『日本建築の特質』太田博太郎博士退任記念論文集 中央公論美術出版 昭和51年所収)による。

存在の可能性
存在
存在定贈

表2. 中国木造建築遺構年表及び軒組図 (附図)

800年		900年		1000年		1100年	1200年	1300年	1400年
疎 組	華	1. 南禅寺大殿 782年(1, 13)	北	華	4. 独楽寺山門 984年(16)				
	仮		(齡)	仮					
	昂	2. 甘肅敦煌(1) 第148窟より	南	華					
詰 組	華		北	華	5. 華林寺大殿 964年(12)				
	仮		(遼・金)	仮					
	昂	3. 仏光寺大殿 857年(4)	南	華	6. 独楽寺観音閣 984年(11) 下層	9. 広済寺三大士殿 1025年(19) 10. 下華嚴寺薄伽教蔵 1038年(16) 11. 仏宮寺塔 1056年(11) 12. 晋祠聖母殿 櫓 1023~31年(11) 13. 奉国寺大雄殿 1020年(16) 14. 晋祠聖母殿 櫓 1023~31年(11) 15. 仏宮寺塔1056年(11)	19. 晋祠献殿 1168年(11) 20. 上華嚴寺大殿 1140年(16) 21. 善化寺大殿 1184年(8*) 22. 善化寺天王殿 1128~43年(16) 23. 仏光寺文殊殿 1137年(12)		
組	華		南	華	7. 独楽寺観音閣 984年(11) 上層				29. 芮城城隍廟 14世紀(6) 30. 三聖寺大殿 14世紀(6) 31. 永安寺 法正宗殿 14世紀(6) <事例多数>
	仮		(五代・宋)	仮	8. 大雲寺大殿(軒・櫓) 940年(8*)				
	昂			昂	16. 保聖寺大殿 1074年(8*) 17. 永寿寺 1008年(12) 18. 保国寺大殿 1013~1102年(8*)	24. 营造法式より 1103年(12) 25. 臨汾大中樓 1196年(15) 26. 营造法式 1103年(12) 27. 少林寺初祖庵 1125年(12)	28. 河北陽和樓 1357年(3-12~15)		<事例多数>

註) 建築名の前の数字は付図の番号を、うしろは建築年代を示す。
また、()内の数字は参考文献中の中国関係の番号を、※付は
日本関係の番号を示す。
11、15、16は類似の形式のため省略

華: 華拱による軒組
仮: 仮昂による軒組
昂: 昂による軒組

1. 南禅寺大殿

2. 甘肅敦煌(1)

3. 仏光寺大殿

4. 独楽寺山門

5. 華林寺大殿

6. 独楽寺観音閣 下層

7. 独楽寺観音閣 上層

8. 大雲寺大殿

8. 大雲寺大殿

9. 広済寺三大士殿

10. 下華嚴寺薄伽教蔵

12. 晋祠聖母殿

13. 奉国寺大雄殿

14. 晋祠聖母殿

17. 永寿寺

18. 保国寺大殿(柱上)

18. 保国寺大殿(柱間)

19. 晋祠献殿

20. 上華嚴寺大殿

21. 善化寺大殿(柱上)

21. 善化寺大殿(柱間)

22. 善化寺天王殿

23. 仏光寺文殊殿

24. 营造法式より

25. 臨汾大中楼

26. 营造法式

27. 少林寺初祖庵

28. 河北陽和楼

29. 芮城城隍廟

30. 三聖寺大殿

31. 永安寺
伝法正宗殿

表3-1 高麗時代木造遺構

(柱心包系)疎組

図及びデータの出典は参考文献Bの番号を備考に示す。

番号	建築名 (所在地・年代)	規模 ・屋根形	小屋組	軒組	斗拱形	牛舌形	柱形	備考
1	鳳停寺極楽殿 (慶北・安東) 高麗後期	3×4 切妻	二重虹梁 礎、又拵	大梁 肘木 大斗上肘木 2段2手		ナ シ	胴張	4, 5, 9, 11 2段とは、大斗上に重なる 肘木が2本をいう。
2	浮石寺 無量寿殿 (慶北・榮州) 高麗後期	5×3入母屋	二重虹梁 束立て、又拵	持送り材 つなぎ梁端 (特拵) 肘木 大斗上肘木 2段2手			胴張	4, 5, 7-3, 9
3	修徳寺大雄殿 (忠清・礼山) 1308	3×4 切妻	二重虹梁 礎、又拵	つなぎ梁端 (特拵) 大斗上肘木 (特拵) さし肘木 1段2手			胴張	4, 5, 7-4, 9
4	成仏寺極楽殿 (蔚山・蔚州) 1321	3×2 切妻	二重虹梁 礎、又拵	大梁端 肘木(特拵) 大斗上肘木 (特拵) さし肘木 1段2手			胴張	1-12, 4, 5, 9
5	成仏寺応真殿 (蔚山・蔚州) 1327	7×3 切妻	二重虹梁 礎、又拵				胴張 (礎柱3、円)	4, 5 軒組は1530年詰組に改造の為、 大梁上の旧斗拱を示す。
6	江陵客舎門 (江原・江陵) 高麗末	3×2 切妻	二重虹梁 礎、又拵	持送り材 大梁端(特拵) 大斗上肘木 さし肘木 1段2手			胴張	1, 7-5
7	銀海寺居祖庵 靈山殿(慶北・永州) 1375	7×3 切妻	大斗束立て 又拵	つなぎ梁端 大斗上肘木 (特拵) さし肘木2段 1段1手			胴張	1-12, 4, 5, 7-5, 8-15, 9
8	浮石寺祖師堂 (慶北・榮州) 1377	3×1 切妻	二重虹梁 束立て、又拵	大梁端 大斗上肘木 さし肘木 1段2手		ナ シ	胴張	1-6, 7-5, 9

表3-2 高麗時代木造遺構(含鮮初)

(多包系)詰組

図及びデータの出典は参考文献Bの番号を備考に示す。

番号	建築名 (所在地・年代)	規模 ・屋根形	小屋組	軒組	斗拱形	牛舌形	柱形	備考
1	心原寺普光殿 (蔚山・新羅) 1374	3×3入母屋	二重虹梁 授首、東立て	(大梁)+肘木 (榑り材) 肘木(特甜) 肘木(特甜) 大斗上肘木 3段3手 (側面柱と無関係に配置し ている)			胴張	1-12, 4, 5 軒組説明の中()は柱 上と柱間で異なる。
2	釈王寺応真殿 (蔚山・新羅) 1386	5×2 切妻		(大梁)+肘木 (特甜) 大斗上肘木 2段2手			円・粽付	1-6 (写真による) 4
3	開城南大門 (蔚山・新羅) 1394	3×2入母屋	二重虹梁 東立て	(大梁)+肘木 (榑り材) 大斗上肘木 (特甜) 1段1手			円・粽付	1-13
4	釈王寺護持門 (蔚山・新羅) 1401	3×2 切妻	二重虹梁 東立て	(大梁端) 肘木(榑り材) 肘木(特甜) 大斗上肘木 (特甜) 3段2手			胴張	1-12, 4, 8-15

積極的に導入されることとなり、元より工匠を呼び、開城に寿寧宮を建設した。ここでは、間違いなく元の技術の導入があったといえよう。こうした背景の下に、表1に示すように1200年代からの疎組系の、次いで1300年代後半に建設された詰組系の建築の遺構が残されている。(表3-1, 2)

疎組系8棟、詰組系4棟(釈王寺護持門は李朝時代に入っているが、技術的には高麗時代の建築と考えて加えている)についての建築年代については、杉山博士等先学の研究と、韓国文化財研究所による調査報告、朝鮮民主主義人民共和国朝鮮遺跡遺物図鑑編集委員会の見解などを参考に、表3のように決定した。

疎組系建築様式について

これについては、古くは関野 貞博士によって明治36年からの調査を踏まえて、疎組系の建築を日本の天竺様に、詰組系の建築を唐様に対比して分類されたが、これをさらに詳しく論考した藤島玄治郎博士の研究(注12)があり、やはり大仏様と同様の様式の導入があり、形式上の分化があり、さらに禅宗様の様式の導入による折衷化を行いつつ独自の変化をしたとする説を立てておられる。(注12)

その後、また、杉山信三博士が、疎組系が旧来の伝統的な形式のもの(疎組第一形式)、南宋の影響による形式のもの(疎組第二形式)、詰組系の元の様式の影響による形式のもの(疎組第三形式)のように形式分化したものとする説を立てられた(注13)。これらの先学の研究成果を視野に入れつつ、考察を進めたい。

まず、表1に示すとおり、残されている遺構の建築年代をみると、疎組系が詰組系より約150~200年古くから

のものが残り、全体の数も多い。そして、年代を追ってみると、疎組系では江華島政府以前の1棟、それ以後、1300年初頭期のもの4棟、1300年末のもの3棟となっている。詰組系ではすべて1300年末のものである。

これらの遺構が現存したことは、様々な条件が重なったとはいえ極めて偶然性の高いものによることから、ここから直ちに何かをいうことは危険ではあるが、時代背景との関係でみるとなかなか意味の深いものがある。

江華島以前すなわち元の影響のなかった時代の高麗建築唯一の遺構鳳停寺極楽殿は、11世紀、12世紀と中国南北、特に宋との交流の中で、建築文化導入の可能性はあるものの、中国ではまだ詰組系の技術様式が試行されつつあった時代で、旧来からの疎組系の技術と様式が存在していた時代でもあったことから、朝鮮古来の伝統を継承した事例と見ることができ。すなわち、胴張り柱上に曲面斗線りの斗を置き、肘木を重ね、その上に梁を置く。小屋組は、二重虹梁を蓼股(花盤)で受け、棟木は、叉首受けとする唐代南禅寺大殿にも共通する形式の遺構である。(注14)

次いで、表3-1の2~5の事例であるが、梁及び肘木先に(牛舌)がつくこと、皿斗がつくこと、さし肘木が用いられることが変化として表れる。

(柱心包系)の牛舌については、拙稿(注15)で検証したように、中国における発展経過をみると、木鼻からくり出されたものと、尾垂木を簡略化していった形式化したものがあり、(柱心包系)は、前述した中国との交流関係と形態上、肘木成内でくり出されていることから、中国の影響を受けた前者に属するものと解される。

このような変化は、(柱心包系)建築の形式がまだ主流であったとき、刻々伝えられる中国建築の技術様式が(柱心包系)建築で受け止められ、時代の中で変化していた結果であり、日本のように新しい様式(大仏様)として受け入れられなかったと解する。

1270年代の開城寿寧宮の建設以後、間違いなく元の工匠を通じて、尾垂木をもたない肘木の重ね合わせによる軒組から成る元風の詰組(多包系)を普及させていったものと解されるが(両国の交流関係の深さからも)、それが(柱心包系)に影響して、変化したのが表3-1の7, 8の遺構事例といえる。

斗尻が直線につくり出されるが、これは、元末の変化と対応する変化であり、加工上からは細工が容易となることから、一種の簡略化と見ることが出来る。

このように、(柱心包系)の建築は、伝統的な唐以前にもつながる形式を継承してきたが、高麗時代の後期以後、中国の建築の発展と、その技術様式の導入がはかれる中で、時々形式を受け入れて変化を重ねていった。

従って、高麗時代の(柱心包系)建築形式は、固定した様式を確立したものではなく、変化の過程にあると考えたほうが妥当である。

朝鮮では、日本のように旧来からの形式「和様」が一方で使われながら、平行して、変化した形式「大仏様」が使われるということがなかった。

従って、その変化は、形式の確立をいう程に明確な分

類を行い整理するよりも、ひとつの様式上の変化ととらえた方が朝鮮建築の木造技術の発展を理解する上で妥当と考える。(柱心包系)の建築が様式としてのアイデンティティであるかのように、胴張り柱に固執し、木鼻形の(牛舌)を形状は様々にあるものを守り、さし肘木を用いることで(多包系)建築との違いをもたせた。また、肘木端部を斜めに切ること(旧来の形式を残す鳳停寺極楽殿を除いて)、下端にS字形の繰り形をつけることは、中国にもみられない形式で注目されるが、これもこの系統の特徴となっている。

詰組系(多包系)建築様式について

表3-2に示す4棟の遺構は、表2に示す元代の(仮昂)付の系統に類するもので、前述の歴史的背景ともあまって元の(仮昂)系の技術・様式を導入した結果といえよう。その為、尾垂木の使用が全くみられず(李朝時代1605年建築花嚴寺極楽殿が現存する唯一の尾垂木使用遺構)、日本・中国と異なる朝鮮建築の構造上の特殊性ともなった。

4. 結語

以上の考察から、次のことがまとめとしていえる。

1. (柱心包系)建築は、形式分類するほどに分化せず、系の中での変化の一部と見た方が妥当である。
2. (多包系)建築は、元の(仮昂)系の技術・様式を導入発展した結果、尾垂木の使用がほとんどない。

注1 『高麗史』(李朝5代文宗1451年~6代端宗1454年編集)

注2 参考文献・朝鮮関係A-2

注3 参考文献・朝鮮関係A-1

注4 参考文献・中国関係にも重要遺構として研究者に認知されている遺構。

注5 頭貫材の断面が、柱筋上の桁あるいは、通肘木の断面と比べて、南禅寺大殿では等しいが、仏光寺大殿では貫の方が大きくなっており、構造的な配慮がなされた結果と考える。

注6 参考文献・中国関係17

注7 参考文献・朝鮮関係B-17

注8 参考文献・朝鮮関係B-6

注9 参考文献・朝鮮関係B-17

注10 参考文献・朝鮮関係B-18

注11 参考文献・朝鮮関係B-19

注12 参考文献・朝鮮関係B-2

注13 参考文献・朝鮮関係B-4

注14 参考文献・朝鮮関係B-17

注15 参考文献・朝鮮関係B-16

■ 参考文献一覧

朝鮮関係

A 一般史

1. 『日本史年表』(歴史学研究会 岩波書店 1966年)
2. 『韓国新論』(李基白、宮川晃一、中川清武 清小弘文堂書房 昭和46年)
3. 『高麗朝官制の研究』(周藤吉之 法政大学出版局 1980年)

B 建築史

1. 『朝鮮古蹟図説』(朝鮮総督府蔵版)
①大正5 ②大正6 ③大正7 ④昭和5 ⑤昭和6 ⑥昭和7 ⑦昭和8
昭和48年 名著出版復刻による
2. 『朝鮮建築史論1~5』(藤島亥治郎 昭和5年2月~7月 日本建築学会誌「建築雑誌」 昭和5年4月~8月)
3. 『朝鮮の建築と芸術』(関野貞 岩波書店 昭和16年)
4. 『韓国の中世建築』(杉山信三 相模書房 昭和59年)
5. 『韓国建築様式論』(鄭寅國 一志社 1974年)
6. 『朝鮮三国時代建築と法隆寺金堂の様式的系統』 関口欣也
(『日本建築の特質』太田博太郎博士退任記念論文集 中央公論美術出版 昭和51年)
7. 韓国の古建築シリーズ (韓国文化財管理局)
[1] 海印寺藏経板庫 (1973年) [7] 石塔 (1985年)
道岬寺解脫門 (1973年) [8] 伝燈寺大雄宝殿 (1986年)
無為寺極楽殿 伝燈寺薬師殿
[2] 開心寺大雄殿 (1975年) [9] 米蘇寺大雄宝殿 (1987年)
松広寺国師殿 神勒寺祖師堂
松広寺下金堂 羅漢寺大雄殿
高山寺大雄殿 [10] 羅漢寺大雄宝殿 (1988年)
[3] 浮石寺無量寿殿 (1976年) 鳳停寺古今堂
浮石寺祖師堂 鳳停寺大雄殿 (1989年)
[4] 修徳寺大雄殿 (1979年) 開蔵寺大雄宝殿
[5] 江陵客舎門 (1982年) [12] 龍門寺大藏殿 (1990年)
瑞城寺大雄殿 鳳停寺華嚴講堂
鎮海寺居祖庵蓋山殿 [13] 龍門寺大藏殿 (1991年)
[6] 龍電寺薬師殿 (1984年) 栗谷寺大雄殿
浄水寺法堂 威鳳寺普光明殿 (1992年)
開日寺門通殿 仏甲寺大雄殿
8. 朝鮮遺跡遺物図鑑/同左編集委員会編 朝鮮民主主義人民共和国
『第5巻 高句麗篇3(壁面墳)』1990年 『第13巻 李朝篇1(城、宮城)』1993年
『第6巻 高句麗篇4(壁面墳)』1990年 『第14巻 李朝篇2(建物、構造物)』1993年
『第9巻 後期新羅篇』1991年 『第15巻 李朝篇3(寺)』1993年
『第10巻 高麗篇1(建築物、城)』1992年 『第16巻 李朝篇1(寺、遺物)』1994年
『第11巻 高麗篇2(構造物、絵画、遺物)』1993年
『指定文化財解説(韓国文化財管理局)』1973年
9. 『元州花華殿寺実測調査報告書(韓国文化財管理局)』1985年

1. 『鳳停寺極楽殿修理工事報告書(韓国文化財研究所)』1992年
2. 『ソウル南大門修理報告書(ソウル市教育委員会)』1966年
3. 『高句麗壁面古墳から見た木造建築』金正基(『金載元博士回甲記念論叢』1971年)
4. 『韓国木造建築の彫刻に関する考察』金東賢
(『無錫李光魯教授停年退任記念建築学論叢』1993年8月)
5. 『斗拱形式からみた韓国多包系建築の変遷に関する研究』中西 章(『録』1986年10月)
6. 『朝鮮建築の「牛舌」の成立形態に関する一考察』
(『日本建築学会計画系論文報告集 1994年10月審査終了』)
17. 『鳳停寺極楽殿より見る高麗時代の建築様式に関する一考察』
(『日本建築学会計画系論文報告集 1994年11月審査終了』)
8. 『華城々役儀軌』(李朝純祖代1801年木版として刊行。水原市華城々役儀軌保存会により復刻)の中に建築用語が記されている。これによって「牛舌」を使用する。
9. 『朝鮮の寺院建築』(『アジアの仏教名蹟』所収)雄山閣(昭和63年12月)
20. 『文化財大鑑』(国宝編、宝物編、韓国中央博物館、1968年)
21. 『韓国建築史』(尹張燮、韓国東明社、1973年)

中国関係

1. 『中国建築簡史・第1冊・中国古代建築簡史』(1962年10月)
2. 『梁思成文集(1)』(中国建築工業出版社 1982年12月)
3. 『梁思成文集(3)』(中国建築工業出版社 1985年3月)
4. 『梁思成文集(4)』(中国建築工業出版社 1986年9月)
5. 『劉敦楨文集(1)』(中国建築工業出版社 1982年11月)
6. 『科技史文集 第2輯』(上海出版社 1979年10月)
7. 『科技史文集 第7輯』(上海出版社 1981年6月)
8. 『建築歴史と理論 第3・4輯』(江蘇人民出版社 1982~3年度)
9. 『建築雑誌』(日本建築学会 昭和44年1月)
10. 『建築雑誌』(日本建築学会 昭和51年1月)
11. 『中国古代建築技術史』(建築科学研究院 中国建築工業出版社 1980年10月)
12. 『建築史論文集 第7輯』(清華大学建築系編 1985年12月)
13. 『建築歴史研究 第1輯』(中国建築科学研究院 1982年10月)
14. 『古建築園林技術 1984年第4期』(1984年12月)
15. 『古建築園林技術 1986年第11期』(1986年6月)
16. 『遼金時代の建築と其の佛像』(竹島卓一 龍文書局 昭和19年)
17. 『宮造法式の研究1』(竹島卓一 中央公論美術出版 昭和45年10月)
18. 『中国壁面古墳の建築図と初唐建築の様式について』
田中 淡(『東方学報』京都第49冊、昭和52年2月)
19. 『清工部工程做法則例』梁思成(中国营造学社刊、1934年)の中国建築工業出版社
1981年 復刻版
20. 『新中国で発表された重要建築物』(日本建築学会『建築雑誌』伊藤延男、沢村仁
関口欣也 1969年1月)
21. 『中国の建築』(雑誌『建築知識』1975年1月~77年1月連載、『中国建築簡史・
第1冊中国古代建築簡史』中国建築史編集委員会編 1961年を平井聖、関口欣也、
片桐正夫、八木清勝、田中淡により共訳)

(1994年12月1日原稿受理、1995年6月22日採用決定)